

# 『田舎教師』について

田山花袋

青空文庫



私は戦場から帰って、まもなくO君を田舎いなかの町の寺に訪ねた。

その時、墓場を通りぬけようとして、ふと見ると、新しい墓標に、『小林秀三之墓』という字の書いてあるのが眼についた。新仏らしく、花などがいっぱいそこに供そなえてあつた。

寺に行つて、O君に会つて、種々戦場の話などをしたが、ふと思ひ出して、「小林秀三つていう墓があつたが、きいたような名だが、あれは去年、一昨年あたり君の寺に下宿していた青年じゃないかね」

「そうだよ」

「いつ死んだんだえ？」

「つい、この間だ。遼陽りょうようの落ちた日の翌日かなんかだったよ」

「かわいそうなことをしたね、何だえ、病気は？」

「肺病だよ」

「それは気の毒なことをしたね」

私はその前に一二度会ったことがあるので、かすかながらもその姿を思い浮かべることができた。私は一番先に思った。「遼陽の陥落の日に……日本の世界的発展のもっとも光榮ある日に、万人の狂喜している日に、そうしてさびしく死んで行く青年もあるのだ。事業もせずに、戦場へ兵士となつてさえ行かれずに」こう思うと、その青年、田舎に埋もれた青年の志ということについて、脈々とした哀愁が私の胸を打った。つづいて、『親々と子供』の

中の墓場のシーンが眼に浮かんできた。バザロフとはまるで違つてはいるけれども……。

私は青年——明治三十四五年から七八年代の日本の青年を調べて書いてみようと思つた。そして、これを日本の世界発展の光榮ある日に結びつけようと思ひ立つた。ことに、幸いであつたのは、その小林秀三氏の日記が、中学生時代のものと、小学校教師時代と、死ぬ年一年と、こうまとまってO君の手もとにあつたことであつた。私はさつそくそれを借りてきて読んだ。

この日記がなくとも、『田舎教師』はできたであらうけれども、とにかくその日記が非常によい材料になつたことは事実であつた。ことに、死一年前の日記が……。

この日記は、あるいはこの小林君の一生の事業であったかもしれないなかった。私はその日記の中に、志を抱いて田舎に埋もれて行く多くの青年たちと、事業を成しえずに亡びていくさびしい多くの心とを発見した。私は『田舎教師』の中心をつかみ得たような気がした。

日記は、その死の前一日までつけてある。もちろん、寝ながら、かつ苦みながら書いたろうとおぼしく、墨もうすく、字も大きなまづく書いてあるけれども……。私はそれを見て泣きたいような気がした。遼陽の攻略の結果を、死の床に横たわって考えている小さなあわれな日本国民の心は、やがてこの世界的光栄をもたらした日本国民すべての心ではないか。

それに、舞台が私の故郷に近いので、いつそうその若い心が私の心に滲しみとおって感じられるように思われた。日記を見てから、小林秀三君はもう単なる小林秀三君ではなかった。私の小林秀三君であった。どこに行つてもその小林君が生きて私の身边についてまわつてきているのを感じた。

かれの眼に映つたシーン、風景、感じ、すべてそれは私のものであつた。私はその垣ほとりの畔、寺の庭、霜解けの道、乗合馬車の中、いたるところに小林君の生きて動いているのを見た。

H町の寺に行くと、いつもきまつて私はその墓の前に立つた。そこにはすでに友人たちの立てた自然石の大きな石碑が立てられてあつた。そこに、恋もあり、涙もあり、未死の魂もあり、日

本国民としての可憐かれんの愛国心が生きて蘇よみがえつてきているのであった。私は野に咲いた花を折ってきてそこに手向たむけた。

私は秋の日など、寺の本堂から、ひろびろとした野を見渡した。黄いろく色ついた稲、それにさし通った明るい夕日、どこか遠くを通って行く車の音、榛はんの木のまばらな影、それを見ると、そこに小林君がいて、そして私と同じようにしてやはり、その野の夕日を眺め、荷車の響きをきいているように思った。

「悠ゆうゆう々たる人生だ」

こうした嘆声がいつとなく私の口の上るのであった。

戦場でのすさまじい砲声、修羅しゆらの巷ちまた、残忍な死骸、そういうものを見てきた私には、ことにそうした静かな自然の景色がしみじ

みと染み通つた。その対照が私に非常に深く人生と自然とを思わせた。

ある日、O君に言つた。

「みろく彌勒に一度つれて行つてくれたまえ」

で、秋のある静かな日選ばれた。私達は三里の道、小林君が毎日通つて行つたその同じ道を静かにたどつた。野には明るい日が照り、秋草が咲き、里川が静かに流れ、角のうどん屋では、かみさんがせつせとうどんを伸していた。

私は最初に、かれのつとめていた学校をたずねた。かれの宿直をした室、いっしよにきょうべん教鞭を取つた人たち、校長、それからオルガンの前にもつれて行つてもらつた。放課後で、校庭は静か

に、やはり同じようにして、教師や生徒がボールなどをなげいてた。

弥勒の村は、今では変わってにぎやかになったけれども、その時分はさびしいさびしい村だった、その湯屋の煙突からは、静かに白い煙が立ち、用水縁べりの小川屋の前の畠では、百姓の塵埃じんあいを燃している煙が斜めになびいていた。

私とO君とは、その小川屋で、さいの煮つけで酒を飲んだ。

学校の校長が、私が話を聞きに行ったのを探偵にでも来たのかと思つて、非常に恐れていたのも滑稽こっけいであつた。

それから私は一度小林君の親たちの住んでいる家を訪ねた。やはり、小林君のことを小説にするとはいえないので、書画の話を

聞くふりして出かけた。私はやさしい母親とのんきな父親とを見た。その家はじつに小林君の死の床の横たわったところであつた。この家を訪問してから、『田舎教師』における私の計画は、やや秩序正しい形を取つて来た。日記に書いてあることがすべてはつきりと私の眼に映つて見えた。で、さらに行田から弥勒に行く道、かれの毎日通つた路を歩いてみることにした。

私はいろいろに考えた。寺に寄宿した時代のかれは、かなりにくわしくわかつたが、その交遊の間のことかどうものみ込めない。中学校時代の日記は、空想たくさんで、どれが本当かうそかわかわらない。戯談じょうだんに書いたり、のんきに戯たわむれたりしていることばかりである。三十四五年——七八年代の青年を描こうと心がけた

私は、かなり種々なことを調べなければならなかった。そのころの青年でも、もう私の青年時代とは、よほど異った特色やらアイブやらを持っていたから……。『明星』にあこがれた青年、なかばロマンチックで、ファンタスチックで、そしてまだ新しい思潮には到達しない青年の群れ——その群れを描くことについては、私にとって非常な困難があつた。中学時代のかれの初恋、つづいて起こつた恋愛事件、それがのみ込めないので、長い間筆がとれなかつた。

二年、三年は経過した。

この作は、『蒲団』ふとんなどよりも以前に構想したものであるが、『生』を書いてしまい、『妻』を書いてしまつてもまだ筆をとる気

になれない。材料がだんだん古くかび黴が生えていくような気がする。それに、新しい思潮が横溢して来たその時では、その作の基調がロマンチックでセンチメンタルにかたよりすぎている。『生』『妻』と段々調子が低く甘くなつていつているのに、またこのセンチメンタルな作では、どうもあきたらないというような気がする。また、それでぐずぐずしているうちに一年二年は経つた。

しかし、日記をひもと繙いて見ると、どうしても書かずにはいられない。そこには一期前の現代の青年の悲劇がありありと指すごとく見えている。で、そんな世間的のことは考えずに書こう。ロマンチックであろうが、センチメンタルであろうが、新しい思潮に触れていまいが、そんなことは考えずに書こう。こう決心して、そ

れからK氏——小林君の親友のK氏を大塚に訪問し、手紙を二三通借りて来たりして、やがて行田に行つて、石島君を訪ねた。

石島君は忙しい身であるにかかわらず、私にいろいろな事を示してくれた。土族屋敷にも行けば、かれの住んでいた家の址にもつれていつてくれた。

で、その足で、熊谷町まで車を飛ばした。例の用水に添った描写は、この時に写生したものである。それから萩原君を、町の通りの郵便局に訪ねた。ちようど、執務中なので、君の家の泉州という料理屋に行つて待つていた。萩原君はその二男か三男で、今はH町の郵便局長をしているが、情深い、義理に固い人であるのは、『日記』の中にもたびたび書いてあつた。その日はそこで

ご馳走になって、種々と小林君の話を聞き、また一面萩原君の性情をも観察した。

女たちのほうの観察をもう少ししたいと思っただけで、どうもそのほうは誰も遠慮して話してくれない。それに、その女たちにも会う機会がない。遺憾だとは思ったが、しかたがないので、そのまま筆をとることにした。

六月の二日か三日から稿を起こした。梅雨の降りしきる窓ぎわでは、ことに気が落ちついて、筆が静かな作の気分と相一致するのを感じた。そのくせ、その時分の私の生活は『田舎教師』を書くにはふさわしくない気分<sup>しょうそう</sup>に満たされていた。焦<sup>しょうそう</sup>燥と煩悶<sup>はんもん</sup>、それに病気もしていて、幾度か書きかけては、床についた。

しかし、八月いっぱいには、約その三分の二を書き上げることができた。で、原稿を関君に渡して、ほっと呼吸をついた。

それから後は、なかば校正の筆を動かしつつ書いた。関君と柴田流星君が毎日のように催促に来る。社のほうだつてそう毎日休むわけには行かない。夜は遅くまで灯の影が庭の樹立こたちの間にかがやいた。

反響はかなりにあつた。新時代の作物としてはもの足らないという評、自分でも予期していた評がかなり多かつた。それに、青年の心理の描写がピタリと行っていない。こうも言われた。やはり自分で、すつかりのみ込んでしまわなかつた部分が、どこか影が薄いのであつた。

巻頭に入れた地図は、あしかが足利で生まれ、熊谷、行田、弥勒、羽生、この狭い間にしかがいしてその足跡が至らなかつた青年の一生ということをおぼせたいと思つてはさんだのであつた。

関東平野の人たちの中には、この『田舎教師』を手にしているのをそこで見かけた。乗合馬車の中で女教員らしい女の読んでいるのを見たこともあれば、こんな旅館にと思われような帳場に放り出されてあるのを見たことがあつた。「中田の遊ゆうかく廓に行つたなんて、うそだそうですよ。小説家なんて、ひどいことを書くもんですね」　こういう言葉も私の耳にはいった。

実際、中田の遊廓の一条は、仮構であつた。しかし、青年の一生としては、そうしたシーンが、形は違つても、どこかにあつた

に相違ないと私は信じた。一年間、『日記』がとだえているのな  
ども、私にそういう仮構をさせる余地を与えた。それに、その一  
条は、多少、作者と主人公と深く交り合っているような形である。  
刀根とねの下流の描写は、——大越から中田までの間の描写は想像  
でやったので、後に行ってみて、ひどく違っているのを発見して、  
惜しいことをしたと思った。やはり、写生でなければだめだと思  
った。これに引きかえて、発戸ほつと河岸の松原あたりは、実際行って  
みて知っているの、その地方を旅行した人たちからよくほめら  
れた。

刀根川の土手の上の草花の名をならべた一章、これを見ると、  
いかにも作者は植物通らしいが、これは『日記』に書いてあるま

まを引いたのである。

しかし、とにかく、一青年の志を描き出したことは、私にとつて愉快であつた。『生』で描いた母親の肖像よりも、つきすぎていないゆえか、いつそう愉快であつた。私は人間の魂を取り扱つたような気がした。一青年の魂を墓の下から呼び起こして来たような気がした。

今でも、私はH町の寺に行くと、きつとその自然石の墓の前に行つた。そして花などを供えた。その墓石は私にとつては、決してもう他人の墓石ではなかつた。その友だちの植えた檜ひのきの木ももう蔭かげをなしていたが、最近行つた時には、周囲の垣がこわれて、他の墓との境界がなくなつていた。

——『東京の三十年』より——

# 青空文庫情報

底本：「田舎教師 他一編」旺文社文庫、旺文社

1966（昭和41）年8月10日初版発行

1985（昭和60）年重版発行

入力：林 幸雄

校正：松永正敏

2007年4月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 『田舎教師』について

田山花袋

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>